

# 死後の世界を前提とする死生観について

坂井祐円

SAKAI Yūen

はじめに

死後の世界は、死生観を構成する重要な因子である。死後の世界を前提とするかしないかで、死生観は二分される。言うなれば、これは死生観の分岐点である。

死生観というのは、一般的には「死を通して生をどう捉えるのか」、あるいは「どのように生き、どのように死んでいくのか」を問題にする。死とは、言うまでもなく、肉体の死を意味しており、生命活動が停止することを指す。したがって、死は、個体の生の有限性を表している。生が有限であるからこそ、人生の意味が問われてくる。ここに死生観の成立根拠がある、とひとまず言うことができる。

ところが、死後の世界を想定するということは、肉体の死によって個体の生が終わるのではなく、精神的な実在が何らかの世界に移行し、なおも生き続けるということを表している。このとき死生観もまた大きく変わってくる。それは「死の向こう側（死後の世界）を見据えながら、この人生をどう生きるのか」という生への問いかけであり、つまりは、生を死後に至るまで拡張すること（有限性の先延ばし）において、人生の意味を問うことを指している。

生は、死によって終わると考えるか、そ

れとも死後にも何らかの世界が続くと考えるかによって、死生観に違いが生じる。それは、結局のところ、人生の意味をどのように捉えるのかの質的な違いと言ってよいだろう。

さて、このように死生観を大きく二つに分類するとして、とりわけ後者の死後の世界を前提とする死生観というのは、果たしてどれほどの根拠をもち得るであろうか。

近代以前は、死後の世界があるのは当たり前であった。ところが、物質主義に依拠する近代科学の成立によって、肉体が消滅するのに従って精神も消滅するのであり、肉体を離れて精神のみが残るということを実証することは不可能であると結論づけられた。そのために、近代以降の世界観の主流においては、死後の世界は、迷信の類とみなされ、せいぜい比喩表現の一つとして語られるにとどまるものとなったのである。

この傾向は今日でもなお続いている。とりわけアカデミックな装いのある公共の場においては、死後の世界の存在をまともに論じようとすること自体ナンセンスである。研究者自身が死後の世界を確信しているなどと発言すれば、正気でなくなったとみなされるかオカルトの類として嘲笑を浴び、ひいては社会的な信用や地位を失いか

ねない。死後の世界を学問的な対象として扱えろとすれば、宗教社会学の分野か、文化人類学・民俗学の分野くらいではなかろうか。つまりは、新興宗教の話題やスピリチュアルなどの社会現象を扱う場合、あるいは民話、伝説、伝承、風習、民間信仰などの歴史的文化遗产を扱う場合に限られるのである。

しかし、個人的なレベルで見れば、死後の世界を信じている、さらに言えば、確信しているといった人々が、実際には少なからずいる。その中には、特定の宗教への信仰からそのような考えに至ったという人もいれば、何らかの神秘体験に遭遇することによって確信することができたという人もいる。いずれにせよ、その人々は、死後の世界を前提にした死生観の持ち主ということになる。ここには、それなりの哲学なり思想が背景にあるのであり、科学的な実証が十分にできなくとも、何らかの体験的もしくは実感的な根拠性があるとも言えるだろう。しかも、彼らは、その根拠に基づいて自らの生き方や行動指針を決定し、それによって人生を意味づけているのである。

本稿では、死後の世界を前提とする死生観について、まずはその背景にある哲学や思想をスケッチすることを試み、その上で、いくつかの具体的な死生観を取り上げて、それが人生の意味づけにどのように関与するのかを考えてみたいと思う。

## 霊魂と肉体の二元論

近代の科学的世界観によってもはや一掃されたかに見えるが、近代以前では当たり前のように信じられていた世界観がある。肉体と霊魂の二元論である。

肉体が死ぬと、霊魂が抜け出て、この世とは離れた異界へと赴く。太古の昔からど

の地域にも見られる素朴な他界観念は、およそ肉体と霊魂の二元論に基づいている。そして、この世界観が、哲学的に昇華されると、プラトンが『パイドン』において主題化した霊魂不滅説や、デカルトが『情念論』などで展開した心身二元論になる。

心身二元論は、今日では、脳と意識の関係の問題として、意識のハード・プロブレムという哲学課題に受け継がれている<sup>1</sup>。これは要するに、神経細胞（ニューロン）と神経伝達物質からなる電気化学的回路の集積体である物質としての脳から、なぜ主観的な意識体験（現象的意識）が生じてくるのか、という問題である。ちなみに、この主観的な意識体験の核心は、クオリア<sup>2</sup>と呼ばれている。

クオリアとは、ごく簡単に言えば、実感のことである。例えば、美しいメロディを聞いたときに心が癒される、といった場面を考えてみよう。そのメロディのもつどのような音程や波長が聴覚に刺激を与え、脳のどの部位を刺激し、どのような神経細胞

1. 意識のハード・プロブレムを主題的に取り上げたのは、オーストラリアの哲学者デイヴィッド・チャーマーズである。彼が最初に発表したのは1994年の意識についての国際会議であるツーソン会議（アリゾナ大学主催）において、「哲学的ゾンビ」の比喩を用いて説明した。これは次の著書にまとめられている。David John Chalmers, *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory* (Oxford University Press, 1996)（邦訳：林一訳『意識する心——脳と精神の根本理論を求めて』白揚社、2001年）。

2. クオリアという言葉を最初に用いたのは、アメリカの哲学者クラレンス・アーヴィング・ルイスで、1929年の著書の中である。その後、ルイスの弟子ネルソン・グットマンによってこの言葉が広められ、1974年のトマス・ネーゲル「コウモリであるとはどのようなことか」という主観性に関する論文や、1982年のフランク・ジャクソンによる「マリーの部屋」という思考実験などによって、物理的現象にクオリアは還元できないのではないか、という主張がなされた。

の反応を起こし、それによって自律神経の交感や心拍数などがどのように変化するか、そういったことは、今日の脳神経科学によってほぼ解明できてしまう。ここまでは意識のイージー・プロブレムである。ところが、そのメロディを聞いたときに湧き上がってくる高揚感やイメージーション、癒される感覚などは、物理現象として処理することができない。これはまさしく実感としか言いようがなく、この主観的な出来事を客観化しようとするれば、ただその体験者の語りを言語によって記述するという方法をもってするほかない。ただし、もちろんその言語記述がクオリアと一致しているわけではない。クオリアを言語で捉えることもやはり不可能である。

ならば、こうしたクオリア=実感はどこからやって来るのか。まだ解明されていない脳の複雑な回路がもたらすものなのか、それとも脳を超えた何らかのはたらきなのか。この哲学上の難問は、まさに脳の中の幽霊 (Phantoms in the Brain<sup>3</sup>) である。脳科学者たちはなかなか認めようとはしないが、クオリアの発生根拠を、霊魂のような精神的な実在に求めるとすれば、その世界観は古代人が描いていた肉体と霊魂の二元論と大して変わらないことになる。

結局のところ、死後の世界を前提とする死生観を基礎づけているのは、古代から続く肉体と霊魂の二元論なのである。この場合の霊魂とは、脳には還元されない、何らかの精神的な実在にほかならない。したが

3. この言葉自体は、インド出身の脳神経学者ラマチャンドランのベストセラーとなった著書名 (1998年) から借りてきたものである。この著書は脳科学ブームの象徴にもなった。主な内容は神経疾患としての幻肢や幻痛の問題であり、脳と身体感覚との関係が症例をもとに論じられているが、最終章において自己意識とクオリアの問題が考察されている。

って、これは物質から発生するわけではない。物質とは次元が異なる。むしろ相容れないと言っても良いだろう。肉体と霊魂。物質と精神。これら二つの実在は、矛盾しながら共存しているという奇妙な関係にある。

とはいえ、霊魂を、なおも物質に類似した何らかのエネルギー体としてとらえようとする見方もある<sup>4</sup>。人間の思考からすれば、霊魂であっても、物質的な何かとして扱い、対象化しないと把握ができないのであろう。霊魂が、何らかのエネルギー体であり、物質的な何かであるとすれば、これは客観的な認識が可能であり、量的に計測することだってできなくはないはずである。

一方で、精神と物質とともに、精神でも物質でもない、これらを超えた第三の中立的な実在から生み出されるという考え方がある<sup>5</sup>。デカルトと同時代の哲学者であるスピノザは、精神も物質もともに唯一の実在である神の属性であり、神の二つの

4. 代表的な考え方としては、量子脳理論が挙げられる。これは脳のマイクロスケールでの振舞いにおいて、量子力学の法則が深く関わっているとする理論である。とくに理論物理学者ロジャー・ペンローズと麻酔科医スチュワート・ハメロフの説が知られている。ハメロフは、臨死体験や生まれ変わり現象について言及する中で、「脳で生まれる意識は宇宙で生まれる素粒子より小さい物質であり、重力・空間・時間にとわれない性質を持つため、通常は脳に納まっているが、体験者の心臓が止まると、意識は脳から出て拡散する。そこで体験者が蘇生した場合に意識は脳に戻り、体験者が蘇生しなければ意識情報は宇宙に在り続ける。あるいは別の生命体と結びついて生まれ変わるのかもしれない。」と述べている (NHK ザ・プレミアム 超常現象 第1集「さまよえる魂の行方」、2014年1月11日放映)。

5. この考察は、主に次の論文に拠った。野口勝三「〈精神と物質〉序説——心的秩序の存在論」(『京都精華大学紀要』第46号、2015年、pp. 216-201)。

側面にすぎないと考えた。また、ライプニッツは、モノドと呼ぶ無数の実在が、相互に影響し合いながら、事物と生命のすべてを表象しつつ世界を生成しているとし、さらにモノド同士の相互関係は神の予定調和によって統一されていると考えた。こうした神（超越者・調節者）による一元論の思想は、古くは新プラトン主義のプロティノスに遡ることができる。プロティノスによれば、靈魂と肉体を含む万物のすべては、一者（to hen）から流出した靈的な知性（nous）の働きによって表象されたものと考えられている。一者とは、善のアイデアにして、無限なる存在であり、神と同一視される。

さて、現代思想において、このような中立一元論の思想を継承している思索家に、深層心理学のユングを挙げることができる。ユングのいう集合無意識、その中心に位置する自己（Selbst）元型は、個々人の意識や身体のみならず、あらゆる事物を形成し、宇宙全体を調整している根源因であり、神の概念に近い。自己元型はまた、中世錬金術の研究を通して、一なる世界（unus mundus）として解釈されている<sup>6</sup>。

ところでユングは、『自伝』の中で、死後の生命についても言及している。生命を考える上では、現世だけでは不十分であり、死後の世界の生命をも考慮しなければならない。そして、死後の世界とは意識において捉えられる現実とは全く別次元のものであり、それは神話や象徴として捉え得るものだという<sup>7</sup>。つまりは、集合無意識

6. この考察については、次の論文を参照。吉田里美「ユング心理学の源流について」（『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第3号、2002年、118-130頁）。

7. 『ユング自伝 2』「XI 死後の生命」（みずす書房、1973年）を参照。

の世界である。ユングの場合、死後の生命とは、肉体から離れていく靈魂というよりは、意識から無意識へと移っていく自己という元型の中心軸を指しているようにも見える。

## 死後の世界を前提とする死生観の具体相

ここからは、死後の世界に関わる具体的な体験の実例と、それに基づく死生観の具体相について、いくつか見ていきたいと思う。

### 臨死体験

死生観を構成する上で死後の世界が問題になるとき、その典型例としてしばしば言及されるのが、臨死体験である。臨死体験の研究自体は、1970年代から起こったもので<sup>8</sup>、研究者たちによって世界各地の多くの事例が数万件に及んで蓄積され、国際臨死研究協会が設立されるなどの広がりも見せている。したがって、この現象そのものに対する疑いを挟むことはできない。とはいえ、科学者や医師たちのほとんどは、臨死体験とは酸欠状態となった脳内で麻薬物質によって引き起こされた幻覚である、という立場を取っている。

ところが近年、ハーバード・メディカルスクールの准教授で脳神経外科医であるエベン・アレグサンダーによる自身の遭遇した臨死体験の報告をまとめた本が話題となり<sup>9</sup>、再び臨死体験の議論に注目が集まって

8. エリザベス・キューブラー＝ロス『死ぬ瞬間』やレイモンド・ムーディ『かいまみた死後の世界』などが研究の発端である。日本では、立花隆『臨死体験 上・下』（1994年）によって臨死体験という言葉が定着した。

9. Eben Alexander III, *Proof of Heaven: A Neurosurgeon's Journey into the Afterlife* (Simon & Shuster, 2012) (邦訳『プルーフ・オブ・ヘヴン——脳神経外科医が見た死後の世界』2013年)。

いる状況がある。アレグザンダーの臨死体験は、重度の細菌性髄膜炎によって昏睡状態に陥り、7日後に奇跡的に覚醒して後遺症もなく回復した、という世界でも極めて稀なケースの中で起こったものである。彼は退院後に、入院中のCTスキャン、臨床検査や神経学的検査の所見などのデータを詳細に調べ上げ徹底的に検証した結果、彼の臨死体験は、意識が脳機能とは独立して存在することを証明するものだと結論づけた。また、臨死体験中に、一度も会ったことのない（しかも、すでに亡くなっていたと後に知ることになる）妹が現れて会話するという出来事を報告しており、経験的な記憶から構成された幻覚という見方では説明のつかない現象であるとしている。

反論の余地がないほど説得力があるように見えるアレグザンダーの考察であるが、しかしながら、批判的な反応もないわけではない。たとえば、脳が昏睡状態の中で機能停止に陥っていたとしても、覚醒する直前の脳の回復時において見た幻覚であれば、脳内現象という説明もつくというものである。けれども、こうした脳内発生説からの批判は、アレグザンダーの考察に比べて説得力があるとは言えず、彼の臨死体験のもつ意義をなんら覆すものではないようである。

そもそも「脳（物質）に還元できない独立した意識」という存在は、物質主義に依拠するほかない近代科学の方法論からすれば、初めから論理矛盾が生じており、証明自体が不可能であると言ってよい。臨死体験や脳とは独立した意識の存在を本格的に検証するためには、物質主義とは別のパラダイムが必要なのではないだろうか。

ところで、臨死体験者の多くは、人格変容とも言えるようないくつもの大きな精神

的变化が起きることが報告されている<sup>10</sup>。その中でも、死に対する恐怖感がなくなるとともに、人生は意味に満ちており神聖な目的があるとする霊的な意識に芽生える、という変化が最もよく知られている。物質的な欲求が薄れ、精神的な知識や感性を広げることへの欲求が高まると同時に、生命の畏敬の念を強く抱き、他者への思いやりや気遣いが自然にできるようになるなど、その生き方や行動はもはや宗教的であると言ってよい。これは、臨死体験者のもつ死生観と言ってもよく、死後の世界を体験的に確信したからこそもたらされる精神性であるようにも感じられる。

#### 生まれ変わり・前世記憶

輪廻転生の思想は、古代インドに起源をもち、因果応報に基づく業の思想と結びついている。これはヒンドゥー教のみならず、仏教にも多大な影響を与え、ひいては東アジア地域全般に広まった思想でもある。西洋では、古代ギリシャなどに輪廻の思想が見られるが、キリスト教の隆盛のもとでほとんど影を潜めていた。しかしながら、19世紀中頃になって、ロマン主義や進歩史観と結びついたリインカーネーション（再受肉）の思想が、フランスを中心に起こり、神智学などの影響も相俟って、今日では神秘主義の色彩が濃厚な生まれ変わりの思想として引き継がれている<sup>11</sup>。

生まれ変わりを扱った学術研究としては、アメリカ・ヴァージニア大学の精神科医アン・ステイーヴンソンによる研究が

10. Kenneth Ring, *Lessons from the Light: What We Can Learn from the Near-Death Experience* (Moment Point, 2006).

11. この分野について、近年刊行された著書として次のものがある。竹倉史人『輪廻転生——〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語』（講談社現代新書、2015年）。

有名である<sup>12</sup>。彼は、1960年代からインドにおいてフィールドワークを行い、2～5歳の子どもが語った前世の記憶の内容を丹念に追跡調査する中で、いくつかの事例において事実とかなり高い確率で照合することをつきとめ、信頼性に足るとして、世界的にも権威のある医学雑誌 (*Journal of Nervous and Mental Disease*) に発表した。この調査は、慎重な検討が積み重ねられており、学術的に一定の高い評価を得ている。

一方で、前世療法と呼ばれる、退行催眠を用いたセラピーによる生まれ変わり研究へのアプローチがある。これは、クライアントを苦しめている病気やトラウマの原因を、幼少期を超えてさらに出生前に、すなわち前世の記憶にまで遡って探っていく、解消しようとする治療法で、人は生まれ変わりを何度もくり返しているという転生観が前提になっている。ブライアン・ワイズやジョエル・ホイットン（ともにアメリカの精神科医）などの実践例が知られており<sup>13</sup>、退行催眠によって導き出された多くの前世記憶についての語りからは、ある種の共通した世界観が見出される。中でも興味深いのは、一つの生から次の生へと生まれ変わる間に、中間生と呼ばれるあの世のような場に留まって、次の生のための準備を

12. 笠原敏雄訳『前世を記憶する子供たち』（日本教文社、1990年）。この邦訳の元になったのは、1961年からのフィールドワークをまとめた、6分冊で総計2000頁に及ぶ225例の詳細な調査報告である。

13. Brian L. Weis, *Many Lives, Many Masters* (New York: William Morris Agency, 1988) (邦訳: 山川紘矢・亜希子訳『前世療法—米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』PHP文庫、1996年)、Joel L. Whitton and Joe Fisher *Life Between Life: Scientific Explorations into the Void Separating One Incarnation from the Next* (New York: Dell Publishing Group, 1986) (邦訳: 片桐すみこ訳『輪廻転生——驚くべき現代の神話』人文書院、1989年)。

する、という語りである。中間生では、ガイドもしくはマスターと呼ばれる魂の導き手のような存在がいて、前の人生を振り返り、次の人生での計画を立てる手助けをするのだという。つまり、魂は、中間生において、次の人生でどのような境遇を生きるのかを自分で決めてから、この世に生まれてくるというのである。たとえ過酷で苦しい境遇の人生であっても、それは中間生で自ら計画し、あえてそうした苦境を体験することを自分に課すために選ぶのであり、その目的は、魂の成長進化のためなのだという。

日本では、産婦人科医の池川明による胎内記憶の調査報告があるが<sup>14</sup>、これによれば、胎内記憶をもつ子どもの多くは、母胎に入る際に、天上のような場所で神様のような存在の助言を受けながら、母親を自ら選んでその胎内に入ってきたと語るといふ。この調査報告もまた中間生を暗示するものである。

前世の記憶は、前世療法のセラピストが無自覚に誘導したもので、退行催眠のトランス状態の中で作り出された虚偽記憶ではないのか、という批判がある<sup>15</sup>。確かにクライアントが語った前世の内容が事実かどうかを検証し照合する手立てがないようなケースの場合には、この批判の妥当性も考慮すべきであろう。とはいえ、クライアントが過去の時代背景について詳細かつ正確に描写するケースや、本人が全く知りえないはずの言語を話し出す真正異言と呼ばれ

14. 池川明『ママのおなかをえらんできたよ』（リヨン社、2004年）、『子どもは親を選んで生まれてくる』（日本教文社、2007年）他。

15. 石川勇一「『前世療法』の臨床心理学的検証—その問題点と可能性」（『トランスパーソナル心理学 / 精神医学』5/1、2004年、66-76頁）。

るケースなどがあり、これらすべてを虚偽記憶であると断定するには無理があるようである。

さて、こうした現代の生まれ変わりの思想が示唆する死生観は、魂が生まれ変わりをくり返しながらかつ断絶して成長していく、という物語である。今生きているこの人生だけがすべてではなく、過去世において様々な人生を経めぐってきたし、これからも未来世において様々な人生を経験していくという見方は、時間軸のスパンが大きく伸長した壮大な成長神話であり、近代の進歩史観の影響や楽天主義的な思考が反映されているようにも見えなくもない。インド由来の輪廻転生の思想は、生まれ変わりを苦しみの無限ループとして否定的・厭世的に捉えており、そこからの解脱を目指すという構図であるが、ここでは生まれ変わりをくり返すこと自体が魂の成長進化のための修行であり、捉え方が反転して、肯定的に位置づけられている。

### スピリチュアリズム

スピリチュアリズムは、19世紀半ばのアメリカで始まり、その後イギリスを中心に当時の一流の科学者や著名人を巻き込んで流行した、心霊科学運動の総称である。その出発点は、心霊現象を科学的に調査するという動きから始まった。イギリスでは、交霊会と呼ばれる、霊媒や霊能者が死者の霊や高級霊を呼び出して、心霊現象や霊の物象化現象を引き起こしたり、霊界について質問したり語り合ったりする集会在頻繁に開かれ、多くの著名な学識人が関心を寄せ、信奉する者も少なくなかったという<sup>16</sup>。

16. 吉村正和『心霊の文化史—スピリチュアルな英国近代』(河出書房新社、2007年)、三浦清宏『近代

日本においてもスピリチュアリズムの影響は大きく、大正から昭和初期に興った新宗教や心霊科学協会の発足もさることながら、1970年代からの新新宗教の地盤であったり、さらには2000年代のスピリチュアル・ブームの火付け役であったりしている。

スピリチュアリズムの思想的特徴は、死後の存続や霊魂の存在を主張し、死後の世界の具体的な様相をその構造や法則性とともに示している点である。その前身として、18世紀啓蒙時代に自らの霊的体験をもとに霊界の様子を詳細に記述したスウェーデンボルグの『霊界日記』がある。1847年にアンドリュー・ジャクソン・デイヴィスが『自然の原理』を出版したことを皮切りに、1857年のアラン・カルディックの『霊の書』、1920年代にはモーリス・バーバネルが霊媒となって伝えた『シルババーチの霊訓』、さらにイギリスの心霊現象研究協会の創設者の一人であるウィリアム・ヘンリー・マイヤーズが死後に霊界から送ってきたとされる『マイヤーズ通信』(1930年代)などによって、霊界の階層構造やなぜ人間はこの世に生まれてくるのかの説明された。また日本でも、大本教の開祖である出口王仁三郎が、入神状態で霊界の多層性について語った『霊界物語』(全81巻)をまとめている<sup>17</sup>。

これらの書物の中で説明される死後の世界は、共通しておおよそいくつかの階層構造をもっており、またそれぞれの霊魂に

スピリチュアリズムの歴史——心霊研究から超心理学へ』(講談社、2008年)など。

17. 津城寛文『〈霊〉の探究——近代スピリチュアリズムと宗教学』(春秋社、2005年)、大田俊寛『現代オカルトの根源——霊性進化論の光と闇』(筑摩書房、2013年)など。

は霊的なレベルがあり、そのレベルの高低に応じてたどり着く霊界の場所も決まってくるという。具体的な描写を見てみよう。例えば、高級霊とされるシルバーバーチの説明によれば<sup>18</sup>、この地上世界（物質界）で亡くなると、まずは幽界の入口に至り、自分の守護霊やすでに亡くなった親族や友人に会うことになる。ここでは地上での人生を映画でも見るかのようにレビューされ、反省点などの指摘を受ける。こうした作業を経て、幽界に辿り着くと、ここでさらに上層界に行くための準備として、地上の生活と似たような生活をしばらく送る。ただし、この生活は、イメージしただけで食事や物品が現れ、容姿を自由に換えられたり、行きたい場所に瞬時に移動できたりする。しかし、あまりに自分の思う通りになるのでだんだんと飽きが出て、物欲に興味がなくなり、心境の変化が訪れる。こうして純粋な霊魂だけとなった後、さらに向上して霊界へと辿り着く。ここは霊的なレベルに応じて無数の階層に分かれていて、それぞれが自分のふさわしい霊界の場所に落ち着く。そこでは類魂（グループ・ソウル）と呼ばれる自分の性質とそっくりな霊魂たちのグループに所属し、霊的なレベルの向上のための学習や他者を助けるための活動を行うことになる。そこで生活を続けているうちに、やがて霊界では学びきれない学習を地上世界で学ぶために、再び生まれ変わる事となる。何度か生まれ変わりを、

18. 近藤千雄の邦訳による『シルバーバーチの霊訓』がシリーズとして潮文社から刊行されている。なお、こうした霊界の構造についての説明や考察は、「スピリチュアリズム普及会」の公式サイト (<http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/>) でまとめられている。なお、スピリチュアリズムに対する徹底した批判と否定的な見解として、苦米地英人『スピリチュアリズム』（にげん出版、2007年）がある。

もはや地上に再生しなくともよい霊的なレベルに達すると、高級霊となってさらに高いレベルへと向上していく。霊界のさらに上層界は人間の想像をはるかに超え、言語で表現することができない場所なのだという。

スピリチュアリズムがもたらす死生観は、個々人が生まれ変わりをくり返ししながら、自身の霊的レベルを上げていき、ひいては人類全体の霊的な向上進化をもたらしていく、という壮大な霊界のプロジェクトを、一人一人の霊魂は使命として担っている、といったことになるだろうか。これは要するに人類の救済計画ということであり、伝統宗教が潜在的に有している救済観念の物語に近いのかもしれない。

## 死後の世界を具象的・実体的に想定することの問題点

近代というメルクマールは、死後の世界という神話を無効化し解体する時代の幕開けであり、象徴だった。伝統宗教や民間伝承などがこれまで語ってきた死後の世界は、すべて虚構であり迷信にすぎない。この世だけがすべて、物質のみが実在である、という世界観を暗黙裡に信じ切って疑わないのが、近代社会である。

現代における死後の世界を前提にする死生観とは、物質主義に染まった近代社会に対する挑発的で破壊的なアンチテーゼであると言えるだろう。物質的に満たされたからと言っても、必ずしも精神的に満たされるとは限らない。閉塞感が漂い無味乾燥化する日常性を打破して精神の充足を回復するためには、人間は何らかの神話や物語を必要とする。かつての他界観念やそれに基づく死生観というのは、そうした機能を担っていた。科学主義が蔓延している現代社



会であっても、基本的に人間は変わっていない。むしろいっそう神話や物語を渴望していると言ってしまうのではなからうか。それが今日でもなお死後の世界を求めようとすする人々の原動力にもなっているように思う。

とはいえ、現代社会においては、死後の世界の実在を単純に信じることはできないのも確かである。ここでは科学的検証にも耐え得るだけの客観的な根拠が求められる。そうした客観的データの積み重ねを経て構築された死後の世界の内容というのは、神話や物語の装いをもっているとはいえ、かなり具象的で実体的なものである。未知な自然現象に科学的なメスが入り解明されてしまうと、結果的にそれは日常性に還元されてしまう。死後の世界は神秘であり、不可知な領域であるからこそ、日常の現実にとって意義のあるものだったのではないのか。言うなれば、死後の世界のリアリティの度合いがあまりに高くなりすぎると、肉体をもって生きるこの現実とはいったい何なのかがかえってわからなくなるのである。

ここで唐突ではあるが、手塚治虫の『日本発狂<sup>19</sup>』というSF漫画について紹介することにした。この漫画は、主人公の少年イッチが、大勢の幽霊が行進しているのを目撃するところから始まる。イッチは雑誌記者の本田と知り合い目撃談を語るが、翌日本田は交通事故で死んでしまう。やがて本田の霊魂は、イッチの身体を霊媒にして、死後の世界の情報を伝えてくる。それによると、人は死んだら霊魂のみの存在となって死後の世界に行き、そして死後の世

19. この漫画は、高校生向けの雑誌『高一コース』（学習研究社）の1974年4月号から1975年3月号まで連載されていた。

界で死ぬと、記憶を失って赤ん坊となって肉体の世界に産まれてくる、という法則があるのだという。さらに、本田の霊魂の説明によれば、死後の世界では、世界が三つに別れていて、三つ巴の戦争を繰り返していたのである。

死後の世界であっても、現実の世界と変わらず、戦争が行われ、欲望が渦巻いている。この漫画では、死後の世界のほうが、生きている現実よりもさらに過酷な場所のようだ。死神たちに襲われて、死後の世界に連れていかれてしまったイッチは、そこで戦争に反対するレジスタンスと知り合い、今度は霊魂として肉体の世界に戻ってくる。次の会話は、死後の世界でイッチの恋人になった少女くるみ（二人とも霊魂）とのやりとりである<sup>20</sup>。

イッチ「なぜ、生と死があるんだろう……」

くるみ「……わかんないわ」

イッチ「どっちの世界だって住みにくいという点ではおんなしじゃないか……」

くるみ「肉体があるのとないのとのちがいがね」

（中略）

イッチ「ほくは生きたい!! も一度肉体がほしいよ! きみはそうは思わないのかい?」

くるみ「それはあたしだってからだかほしいわ。でももう一度この世界で生まれ変わったら……。そのときは赤ん坊よ……。どっかの家庭のおかあさんのおなかの中の子になるんだわ。そして何もかも忘れてその家の子どもとして育つよ。いやよ、見ず知らずの子になるなんて!! わたしはわたしよ。幽霊でもいまのままがいいわ!!」

こうした会話が示唆しているのは、肉体

20. 手塚治虫『日本発狂』（手塚プロダクション出版（Kindle版）、2014年）、162-163頁。

の世界も、死後の世界も、どちらも有限なものだとわかったときには、どうしても存在することの意味が問われてしまうという点である。「なぜ、生と死があるんだろう」というイッチのセリフが、このことを象徴的に表している。けれども、イッチとくるみは、仕方なく有限な二つの世界のどちらかで生きることを考えるしかない。この枠組みの中で自分の欲求を満たすほかないのである。

スピリチュアリズムに代表されるような死後の世界の具象的・実体的な描写は、手塚の漫画が問いかけるような示唆が当てはまるのではなかろうか。霊魂は地上の世界と死後の世界を往還しながら生まれ変わりをくり返し、霊的に向上進化していくことが人生の目的であるとするすれば、そもそもなぜ私たちは、そんな気の遠くなるような時間をかけてまで、霊的に向上進化をし続けなければならないのだろうか。仮にこのような世界のシステムを創った者（＝神？）がいるのだとすれば、いったい何が目的なのだろう。

結局のところ、具象的・実体的な死後の世界を想定することの問題点とは、有限性を超えること、すなわち、無限性や超越性の観点が欠如していることにある。東洋思想に馴染みのある者からすると、スピリチ

ュアリズムの思考や考察は、どこまでも「有」の思想であり、東洋的な「無」の思想、あるいは大乘仏教の説く「空」の思想が、一切出てこないことに違和感や不可解さを覚えるのではないだろうか。

大乘經典の『華嚴經』には、「三界は虚妄にして、但だ是れは心の作なり」という有名な言葉がある。霊界は階層構造になっているというが、いずれも古代インドの瞑想法（ヨガ行者）たちが発見した三界（欲界・色界・無色界）の域を出ないように思われる。そして、大乘仏教では、それら三界は虚妄であり真の实在ではなく、心が作り上げたものにすぎないと喝破している。そうだとすると、問われるべきは、霊界の構造ではなく、これを作り出している「心」とは何なのか、という問題であるように思う。

死後の世界を前提とする死生観は、近代社会が作り上げてきた物質主義一辺倒の世界観を解体するという点では、ポストモダンのためであり、十分に評価できると思う。しかし、人生の意味を究極的に問おうとするならば、この死生観をさらに推し進めて、有限性を超えた「無」に基づく死生観へと移行しなければならないのではなかろうか。

さかい・ゆうえん  
南山宗教文化研究所非常勤研究員